

歴史に翻弄 孤高の地域

雪を頂くヒマラヤの山岳地帯を遠望する厳しくも美しい自然環境、数百年の歴史に育まれた絢爛たる仏教文化と信仰厚い人々が築いた政治制度、自然とともに生きる遊牧民と農耕民との交易が生み出す社会経済。いずれもが非常に魅力的な研究テーマである。ヒマラヤの彼方に広がる高原地帯に栄えたチベット文明圏が中国に併合されたのはわずか60年前にすぎない。現在のチベットは中華人民共和国の一部であり、藏(チベット)族は中国の少数民族のひとつに位置づけられている。またチベット研究は長い間、仏教文献を通じて考究されてきた精神世界と不可分のものでもあった。ゆえにチベット学は中国史の一部、あるいは仏教学の一部のように扱われ、その影響は現在にまで及んでいる。チベットは峻険な山岳地帯に隔てられているとはいえ、中華文明圏とは陸続きであるにもかかわらず、その文化を積極的

京大人文研 90年の学知

① 池田 巧
(シナ・チベット言語学)



いけだ・たくみ 1962年北海道生まれ。93年、東京大学人文科学研究科博士課程単位取得。山梨県立女子短期大学、立教大学を経て、現在、京都大学人文科学研究所教授。共著に『生きていく文化遺産 デルゲパルカン』(明石書店)など。

に取り入れることはなかった。それはなぜだろうか。



チベットは歴史上、内陸アジアに独自の文明圏を形成し、言語習慣、制度、思想を東アジアの各地へと浸透させた。その影響力は大きく、チベット文明は現代の日本、そしてヨーロッパ世界をも魅了し続けている。チベットは不幸にして近代の歴史に翻弄されて独立した国家となる機会を失った。とはいえ、考えてみてほしい。いまここにひとりのチベ

ット人がいるとしよう。国籍は中国あるいは亡命政権のあるインドかもしれないが、文化的には決して中国人でもなければインド人でもない。チベット社会のなかで生まれ育ち、チベット語で話し考え、チベット仏教を信仰し、長いチベットの歴史を生きた人々の子孫として現代を生きているのである。100年前まで、数世紀にわたる外界の侵入者を拒み続けた天空の秘境は、わずかの20年で劇的に変わった。かつてダライ・ラマの居城であったポタラ宮は、世界遺産の観光地として内地からの中国人観光客で



ポタラ宮の正面に出現した広大な広場。ポタラ宮との間には6車線におよぶ広い道路が整備され、その手前中央には国旗の掲揚台と衛兵の姿が見える。撮影者の背後には西藏和平開放記念碑がある。天安門広場の構造と政治性を見事なまでに再現したこの異空間にチベット人の姿はない。ここを訪れるのは記念写真を撮る内地からの観光客だけである(2016年8月16日撮影)

チベット文明の学際的研究目指す

中国ではチベット学は国学の一分野という位置づけであるが、日本では学際的かつ独立した研究分野としての伝統がある。歴史学の研究者がチベット史を、仏教学の研究者がチベット仏教を、社会人類学の研究者がチベット社会を、言語学の研究者がチベット語を研究しているのだが、共通の基盤があるとはいえ、学問の背景と方法論が大きく異なるために分散しがちでもある。そこで京都大学人文科学研究所における共同利用拠点の活動のひとつとして、古代チベット史を専門とする岩尾一史(現龍谷大学)准教授を班長に「チベット・ヒマラヤ文明の歴史的研究」についての学際的研究」の研究班が組織された。幸い中堅の研究者の賛同と参加を得て、チベット学の諸分野を連携し、チベット研究の拠点形成を目標とする研究活動は5年目を迎え、現在は私が代表班長(世話人)としてその活動を引き継いでいる。

研究拠点の活動の成果は、日本のチベット学の到達点を示す専門的な



賑わっている。ラサの街の中心をなすジョカン(大昭寺)とポタラ宮の前には巨大な「人民の広場」が整備された。しかもジョカンの前の広場に入るには、厳しい手荷物検査のゲートがあり、自動小銃を抱えた兵士が小隊を組んで定期的に巡回する。各地から巡礼者が訪れる数々の名刹には、至る所に監視カメラが設置されている。外国人および域外に住むチベット人が自治区を旅行するには、事前の申請が必要であり、行程にも厳しい制限が課せられているのに対し、内地から来た漢族の観光客は、国内の地であるからと、制約なくどこにでも自由に行くことができる。

論文集をすでに公開したほか、チベットの歴史、宗教、社会、言語についてより深く理解するための一般向けの案内書として、科学研究費補助金基盤研究(S)のサポートのもと、研究班のメンバーが分担執筆した概論『チベットの歴史と社会』(臨川書店刊)をまもなく上梓する予定である。(寄稿)